

研究ノート | Research Notes

奥山順市の仕事

Okuyama Jun'ichi's Experimental cinema

太田 曜

OTA Yo

尚美学園大学

情報表現学科 講師

Shobi University

2019年3月

Mar.2019

奥山順市の仕事

Okuyama Jun'ichi's Experimental cinema

太田 曜
OTA Yo

[抄録]

日本を代表する実験映画作家奥山順市の2017年までのほぼ全作品100作品を分析した。作品の外形的要素から幾つかの項目を立てて分類した。項目は撮影、録音・音声、現像、編集、映写といったリュミエール兄弟以来のフィルムで作られる映画の構造に関わるものだった。奥山順市自身が言っている“一貫して {映画の構造} と {フィルム} そのものの存在感をラディカルに表現した実験映画を制作”ということがこの分類による分析で明らかになった。さらに、奥山順市映画作品に共通する“身体性”や“サービス精神”をいくつかの作品を詳しく検討することで顕在化させた。奥山順市はP.アダムス・シトニーが“構造映画”と名付けた実験映画の一分野に自身の作品を所属させようとしている。しかし、そうした定義を超えた世界でも例を見ないユニークな作品が奥山順市の映画である。

[Abstract]

All 100 works of Jun'ichi OKUYAMA, one of the leading experimental filmmakers in Japan, were analyzed. Classification was made by selecting several items based on external elements of his works. Those items include shooting, recording, developing, editing, and projecting, which are all related to the structure of cinema created with film since Lumière brothers. The analysis with this classification made it clear Okuyama's own words that he had consistently created his experimental films radically expressing "the structure of cinema" and the presence of "film" itself. Furthermore, "physicality" and "spirit of service", which are commonly recognized in Okuyama's film works, were made apparent by studying a couple of his works in detail. Okuyama has been trying to make his works belonging in a branch of experimental film that is named as "Structural Films" by P. Adams Sitney. However, Okuyama's works are far beyond such a definition and incomparably unique in the world.

はじめに

日本を代表する実験映画作家奥山順市は、2017年11月現在100作品を自身のホームページのフィルモグラフィに掲載している。ホームページに掲載されていない作品で、過去に発表されたものも少なからず存在する。^{注1}

ここでは、ホームページに記載のある100作品をもとにして、奥山順市の映画とは何か、

を検証してみたい。100 作品をホームページに従って制作年順に 1 番から 100 番まで番号をつけ、簡単な分類に関する解説もつけたリストを作った。100 作品解説付きリスト^{注2}

これら 100 作品についていくつかの基準を作って分類を試みた。その分類の基準は以下のようなものだった。

まずは大きく技法に関する分類と、材料、機材に関する分類の二つを作り、さらにその中に細かい区分を設けた。技法では、撮影、録音・音声、現像、編集、映写。材料、機材ではフィルム、カメラ、現像機材・薬品、編集機材・スプライシングテープ・セメント、映写機である。

技法の中はさらに細かい分類を行なった。

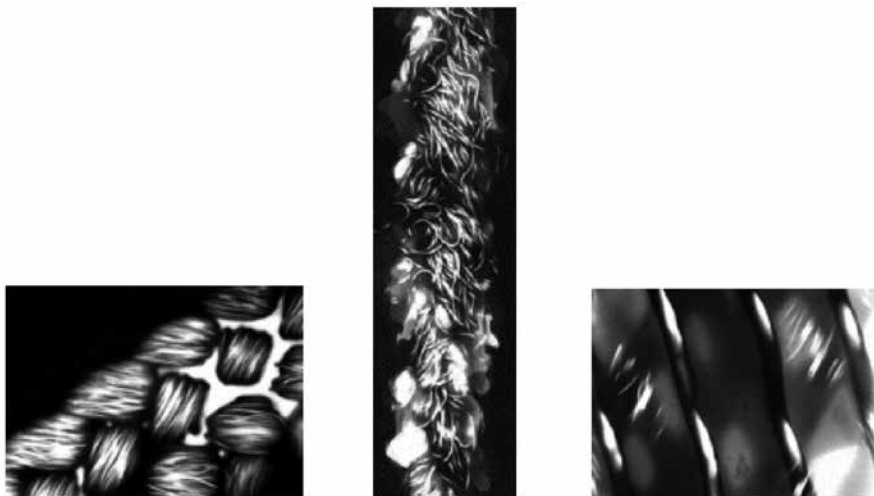
撮影では、一般的なカメラを使う撮影、カメラを使う特殊な撮影、“撮影”をしないで画像を作る、である。カメラを使わないで撮影をする、という項目も考えたのだが、そのような作品は無かった。そもそも撮影という言葉にはカメラを使って画像を作るという意味があるので、カメラを使わない撮影というのは言葉の意味として成立しない。映画の常識を覆すような試みを行なっている奥山順市でも、単語の意味を変えることは出来なかったのかもしれない。

録音・音声では、同時録音撮影、光学録音という二つの項目がある。光学録音は撮影に限らず映写の際にも使う作品があり、それらはこちらへも入れてある。

現像は、通常の現像、現像所での現像と、特殊な方法での現像に分けてある。特殊な方法での現像は、基本的に現像所ではなく作家本人が行なっている。

編集は、特に変わった方法での編集のものや、ファウンド・フッテージのものを入れた。

映写は、一般的なシングルチャンネルのスクリーンへの、基本的に一台の映写機からの映写、一般的な映画の映写のもの、複数の映写画面、マルチスクリーンのもの、映写中に映写画面に介入するもの、映写機を映像の映写以外に使用するもの、に分けた。ちなみに奥山順市にとっての映画作品は基本的に映写されるもので、映写されない作品、あるいは映写出来ない映画は検証した 100 作品の中で 36 番の『フィルムロード (Load The Film to The Film's Road)』1984 年一本だけだった。この作品は一本のフィルムが二股に分かれていて、映写機にかけることができない、すなわち映写ができないフィルムの作品である。



『浸透画 (Osmography)』

ここで行なった分類は絶対的なものではないし、厳密にどこに分類すべきかははっきりしない作品もある。また、作品は分類の一つのカテゴリーだけでなく複数に重複するものも多い。例えば、47番の『浸透画 (Osmography)』1994年は“撮影”をしないで画像を作る映画であり、同時録音（撮影）に近い方法で、光学のサウンド・トラックを作り、特殊な方法での現像をして、最終的にはシングルチャンネルでスクリーンへ映写される映画作品である。ただ、この作品は撮影を一切していないので同時録音というわけではないし、現像をして画像を生成させているようにも見えないことはないが、実際には、現像液がフィルムに巻かれた紐などで乳剤面へ届かなかった部分が現像されないことで画像となっている。“現像”自体も明室で行われているので、一般的な意味での現像という言葉を使うのは適切ではない。

厳密さにはやや欠けるかもしれない、とはいっても、100作品を分類してみると見えて来るものがある。そこから、奥山順市の“映画”の目指すものは何かを考察することが出来るのではないと思われる。

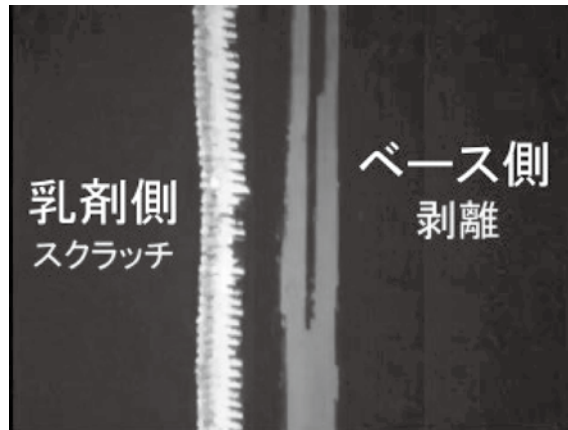
100作品はいわゆる“映画”作品と、“ライブパフォーマンス”作品に分けることが出来る。これは、ホームページで作家本人がそれぞれの作品をこの基準で分類しているからである。ただし、奥山順市本人はライブパフォーマンスも基本的に“映画”だと言っている。例えば、99番『Filmusica Close Open 2017』2017年について、ホームページには最初に“ライブの実験映画”と書かれている。



『Filmusica Close Open 2017』

いわゆる“映画”作品と“ライブパフォーマンス”作品の比率は、ほぼ半分ずつである。いわゆるシングルチャンネルでスクリーンへ映写するものが59作品。ライブパフォーマンスやインスタレーションの作品が53作品である。足して100にならないのは両方にまたがるものもあるからである。

画面内の文字は、予告編だけに挿入。



『生フィルム裏 (RAW FILM BACKING)』

例えば、93 番の『生フィルム裏 (RAW FILM BACKING)』2016 年はシングルチャンネルでスクリーンへ映写される“映画”である。生フィルムにはハレーション防止層(couche anti halo 撮影時点でのハレーション防止の為のバックコーティング)があるが、現像で消失する。それを映写で見せるという、つまりは生フィルムを映写する映画だ。スクリーン上にはフィルムの傷などが“画像”として映写される。傷がサウンド・トラックにまで及んでいれば光学音声で再生することが出来る。この作品では、あたかもその傷が光学音声の仕組みを通してノイズを出しているのかのごとく、作者奥山順市本人がマイクを通して口などでノイズを出すのである。映画の光学録音・再生の仕組みをよく知っていると画面の傷の形状からどのようなノイズになるかをある程度想像することが出来る。この作品の上映では作者奥山順市がフィルムの傷から想像される通りのノイズを口などで出すのだ。かつて日本ではサイレント映画に活動弁士がついて劇中の登場人物のセリフや物語を語ったりした。この作品で奥山順市は活動弁士のように画面に映写される傷によって出るであろうノイズを“ライブパフォーマンス”として口などを使って出している。これはかつて存在した活動弁士を伴うサイレント映画の日本における普通の上映方法とも言えるが、今日の V.J. (ビデオ・ジョッキー) のようなライブパフォーマンスだとも言える。ゆえにこの作品は映画とライブパフォーマンスの両方に分類してある。

1：奥山順市作品の分類

それぞれの作品がどの分類に入るかについて一覧表を二種類制作した。技法と材料・機材で作品を分けた分類一覧表^{注4}、と作品ごとにどこへ部類されるかを示した作品別分類一覧表^{注5} である。

作品の分類は以下のようなものだった。

■撮影

一般的なカメラを使う撮影	23 作品	23%
カメラを使う特殊な撮影	24 作品	24%
“撮影”をしないで画像を作る	13 作品	13%

■録音・音声

同時録音撮影	5 作品	5%
光学録音（磁気録音）	13 作品	13%
■現 像		
通常の現像、現像所での現像	79 作品	79%
特殊な方法での現像	21 作品	21%
■編 集		
編集 ファウンドフッテージ など	16 作品	16%
■映 写		
シングルチャンネルでスクリーンへ映写（一般的な映画の方式）	43 作品	43%
複数の画面、マルチスクリーン	27 作品	27%
映写中に映写画面に介入	21 作品	21%
映写機を映像の映写以外に使用	14 作品	14%
■材料、機材に関する分類		
フィルム	21 作品	21%
カメラ	10 作品	10%
現像機材・薬品	10 作品	10%
編集機材・スプライシングテープ・セメント	10 作品	10%
映写機	92 作品	92%

「映画解体計画」「映画組成計画」「映画発掘計画」

奥山順市作品の特徴は、映画をその構造や、外形的な側面から検討し、それを作品化していることである。自身のホームページによれば“一貫して {映画の構造} と {フィルム} そのものの存在感をラディカルに表現した実験映画を制作。”ということになる。また、それを実現する為の“ライフワークは、既存の映画をぶっ壊して作品化した「映画解体計画（1968～1972）《*注①》、破壊の後の創造に精進した「映画組成計画（1975～2015）」《*注②》、“映画フィルム考古学” という切り口でスタートした「映画発掘計画（2014～）」《*注③》に分類される。ライフワーク以外の作品は「その他（1964～1974）」。作品未満は「番外（1962～）」。”ということになる。

《*注①②③》の中身は以下である。（分類のためにこちらで付けた番号と題名の英語訳を入れた）

《*注①》「映画解体計画（1968～1972）」

全7作品 3) 『Frameless 35』1968年、4) 『切断（Cut Off Movie）』1969年、6) 『わかっか・Being Painted』1970年、7) 『手ごめ（Outrage）』1970年、15) 『No Perforations』1971年、16) 『Frameless 16』1971年、17) 『紙映画（PAPER FILM）』1972年、

《*注②》「映画組成計画（1975～2015）」

20) 『Le Cinéma・映画』1975年、に始まり、32) 『我が映画旋律（My Movie

Melodies)』1980年、47)『浸透画 (Osmography)』1994年、51)『時の流れに乗せて (TOKI NO NAGARE NI NOSETE (MY SELF TIMER) Riding the currents of Time)』1997年、そして89)『皮のフィルム (SKIN FILMS)』2015年、までの多くの作品群

《*注③》「映画発掘計画 (2014 ~)」

88)『W 8 光学トーキー (Regular 8mm Optical Talkie)』2014年、90)『未現ゾーン浸蝕 (THE UNDEVELOPED ZONE EROSION)』2015年、91)『未現ゾーン浸蝕 反射像・透過像 (THE UNDEVELOPED ZONE EROSION REFLECTED IMAGES AND TRANSMISSION IMAGES)』2015年、93)『生フィルム裏 (RAW FILM BACKING)』2016年、そして次回作

ここで本人が「その他 (1964 ~ 1974)」。作品未満は「番外 (1962 ~)」と分類している作品には、初めに挙げた注1の作品などが含まれるのだろう。注1の作品の多くは必ずしも“{映画の構造} と {フィルム} そのものの存在感”を問題にした作品ではない。

「映画解体計画 (1968 ~ 1972)」、「映画組成計画 (1975 ~ 2015)」、「映画発掘計画 (2014 ~)」のどれもが映画の外形的な側面を作品の表現の中心においている。こうした実験映画はP・アダムズ・シトニー (P. Adams Sitney) が1969年のFilm Culture 誌に掲載した論文で“構造映画 (Structural film)”と呼んだものと近いようにも思われる。例えば構造映画の代表的な映画『The Flicker』(1966年16ミリ30分)の作者トニー・コンラッド (Tony Conrad) の、生フィルムをハンマーで叩いて物理的な力で感光させ、バラバラになったフィルムを現像して元に戻した作品『4X-ATAACK』(1974年16ミリ2分)や、フィルムを熱で茹でて現像した『BOILED SHADOW』(1974年16ミリ3分)はその発想において奥山順市の「映画解体計画 (1968 ~ 1972)」の中の、フィルムに紙、木の葉、ビニールなどをつなぎ込み、スパゲッティと一緒にフライパンで炒めたフィルムを上映すると、上映中に切れてしまう、4)『切断 (Cut Off Movie)』1969年や、撮影したフィルムを暗室内で暴力的に加工した、7)『Outrage (手ごめ)』1970年、パーフォレーションの無い16ミリ幅のフィルムを手で引っ張りながら送って映写すると、映写ランプの熱でフィルムが溶けてしまう、15)『No Perforations』1971年、などと共通する指向性が感じられる。



『切断』 Cut Off Movie



『No Perforations』

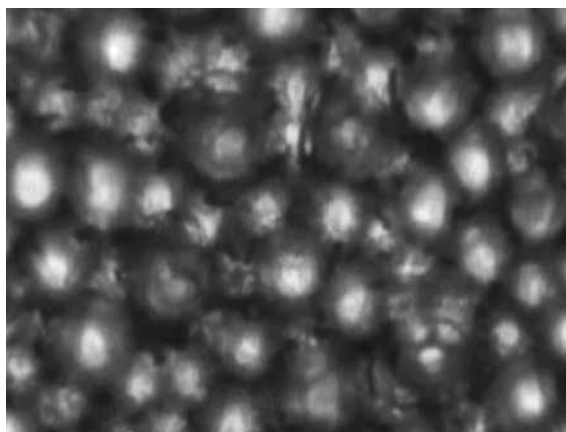
しかし、多くの構造映画と呼ばれる作品がやや観客へのサービス精神に欠けているのに対して、奥山順市の映画は“ {映画の構造} と {フィルム} そのものの存在感 ”を問題にしているにもかかわらず、見る者へのサービス精神に満ちている。また、多くの作品で作家本人が出演し、あるいはライブパフォーマンスを伴う作品では、基本的に作家本人がパフォーマンスを演じている。映画の中、あるいはライブの時に語ったり、オリジナルの歌を唄ったりする奥山順市のサービス精神は、彼が少年時代に児童劇団に所属して出演者として活躍していたこととも関係があるのかもしれない。単に、出演者、ナレーター、歌手、パフォーマーというだけではなく、そのそれぞれのレベルが高いのだ。

映画の構造や、フィルムそのものの存在感が作品のテーマであったとしても、作品は決して概念的なだけの、冷たい抽象的なものではない。誤解を恐れずに言えば、むしろ、映画の構造や、フィルムそのものの存在感を元にした“ 娯楽映画 ”だ、とさえ言えるのではないだろうか。

2：奥山順市作品におけるフィルムの重要性

奥山順市の作品は“ 映画の構造や、フィルムそのものの存在感をラディカルに表現した実験映画 ”ということなのだが、具体的にいくつかの作品について見ていきたい。

まず、ここで言っている映画の構造はリュミエール兄弟以来の古典的な映画の仕組みのことだ。フィルムを、カメラで撮影し、現像して、映写機でスクリーンに映写し、暗い部屋でみんなで見る、そんな映画のことである。この構造の中で、フィルムは絶対に無くしてはならない必需品である。フィルムという物理的な存在の上に古典的な映画は成り立っている。フィルムをめぐる奥山順市の作品は映画の環境の変化も垣間見えて非常に興味深い。昨今、映画産業の世界ではフィルムでの映画製作が終焉を迎えつつある。映画産業にある種依存する形で発展してきた実験映画の世界では、デジタルに移行する実験映画関係者が少なくない。その一方で、フィルムで実験映画を続けたいと考える作家達は、出来ることは自分でやる、映画産業になるべく依存しないで作品を制作するという姿勢で切り抜けようとしている。そうした作家の多くは、なくなりつつある現像所での現像は諦めて、仲間と現像所を作ったり、あるいは自宅の風呂場で現像している。しかし、フィルムは高度な工業生産品なのでなかなか自分で作ると云う訳にはいかない。



『透かしてみれば (PROJECTION SKIN FILMS)』

このフィルムの存続という危機的な状況の中で生まれたのが87)『透かしてみれば (PROJECTION SKIN FILMS)』2013年、である。作品について“長いこと親しんだ記録媒体のフィルムが消え去ろうとしている今、作者は、みかんやタマネギの皮、林檎やメロンの皮など、身近なものの皮を剥き、細長く裁断し、フィルムの様な物を手作りしてみた。そして16mmのリールに巻き取り、透かしてみると・・・。”と言っている。この作品には、フィルム存続の危機という悲壮な状況さえも逆手にとって作品にする作者のフィルムへの強い思いが感じられる。フィルムが消滅しつつあるという状況に悲観的になりかけていた多くのフィルム愛好者が、この作品でどれほど勇気付けられたか、想像に難くない。

奥山順市は17)『紙映画 (PAPER FILM)』1972年、でも紙でフィルムを自作している。収録版を見ると、この時のフィルムには撮影された画像が写っている。『透かしてみれば (PROJECTION SKIN FILMS)』はみかんの皮などをそのまま映写するので、スクリーンに映る像は拡大された皮だ。フィルムの上に映写機のランプの光を通したり、通さなかったりするものがあれば、スクリーン上には何らかの図柄が投影されることになる。



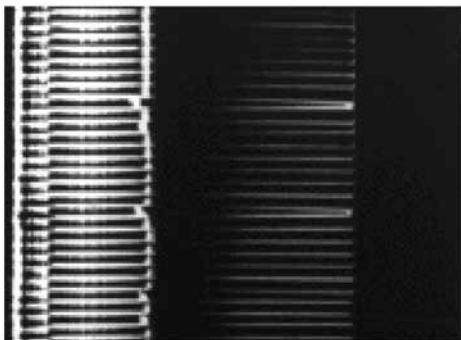
『紙映画 (PAPER FILM)』

47)『浸透画 (Osmography)』1994年は、“撮影機材を一切使わずに制作した作品。糸や紐等手当たり次第フィルムに巻付け自家現像し、現像液がフィルムに付着する加減で微妙な濃淡を表現した。画像はそのままサウンド・トラックにもはみ出し、その物の音を出すこととなった。”という作品だ。スクリーンに投影されるのはフィルム上の図柄だが、それはカメラで撮影されたものでなくても良い。この作品ではフィルムに巻きつけられた糸や紐が、現像の際に現像液がフィルムの乳剤面に達するのを妨げるために、現像されない部分ができ、それがフィルム上の図柄になっている。そうしたプロセスで図柄を作るので、現像作業は暗室ではなくて、明るい所で行なっている。サウンド・トラックにはみ出した図柄は光学の音声システムで再生されて音になる。図柄が音を出すので、同時録音、同時再生のようでもあるが、そもそも撮影はしていないので同時録音ではない。また、16ミリフィルムの光学音声再生は画像とは約1秒分のズレがある。なので、見ている画像が同時に音（ノイズ）を出している訳ではない。

3：光学録音・再生

この光学音声再生での画像と音声とのズレをテーマにしたのが58)『Sync pic あっ！画を見てから音が聴こえる (SYNC PIC)』2001年である。“スダレに音階を意識し、改造した16ミリカメラで撮影を行った。サウンド・トラックにまで写し込んだ映像。フィルム上では画と音は同一であり、ぴったりシンクロしている。しかし、映写機の構造上、音の再生部分が画から離れているため、スクリーン上では画と音がズレてしまう。”これが作者のコメントである。通常の16ミリカメラで撮影される画面の範囲は10.05mm×7.42mmで、その画面の外側にサウンド・トラックがある。カメラを改造したというのは、この撮影範囲をサウンド・トラックの方まで写るように拡大したのだろう。そうして、すだれのような横の縞になったものを撮影する。これを映写機の光学音声で再生すると一定の周波数のノイズになる。縞々の間隔が狭くなればなるほど周波数は高くなる。映画の映写機（カメラもだが）はフィルム上の一枚ずつの静止画像を素早く、次々に、一枚ずつ見せることで動きの錯覚を作っている。静止画を一枚ずつ見せるので、映写機のランプとレンズの間でフィルムは一回ずつ止まって、投影されている。一方の光学音声は、フィルム上のサウンド・トラックに映し込まれた濃淡をランプで照らし、受けた光を電気の強弱にし、それを音にしている。フィルムはこの濃淡を読み取る部分を連続的に走行することで音を出している。フィルムは映写機のまずはランプとレンズの間で一旦静止して、そこで画像がスクリーンへ投影され、シャッターが閉じると一コマ分フィルムが送られ、再び次のコマ分が静止して投影され、ということが繰り返されて、動いているように見える映像がスクリーンに映される。その26コマ先に音を読み取る部分がある。26コマは約1秒、そこではフィルムは連続走行している。

この作品では、その約1秒の時間差に着目したのである。サウンド・トラックまで写るように改造したカメラで分かり易いノイズになる絵柄を選んで撮影。その絵柄が音にもなるのだが、レンズの位置より音声再生の位置が先にあるので、題名のように“画を見てから音が聴こえる”となるのである。



『我が映画旋律 My Movie Melodies』



『まぜるな (MAZELUNA)』

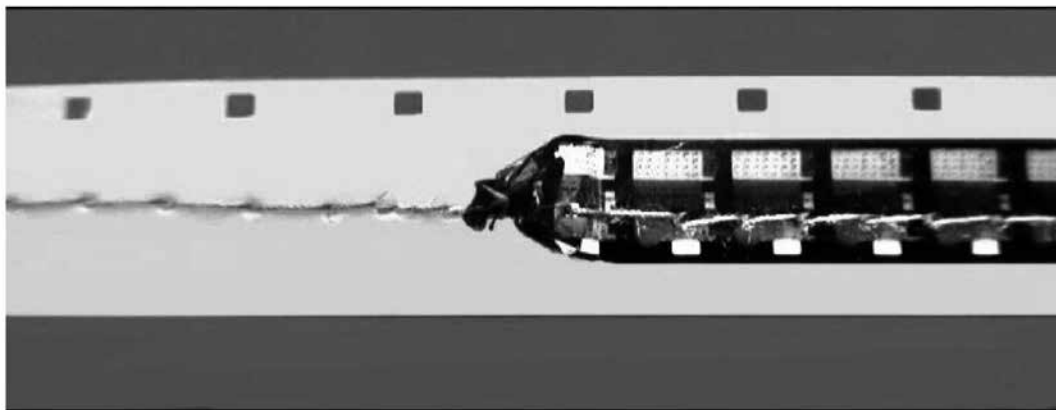
映画の光学録音・再生の仕組みに着目して音まで“撮影”した作品は32)『我が映画旋律 My Movie Melodies』1980年がある。ライブ作品の66)『FILMUSICA』2006年、68)『動けなくなった8ミリ映画』2006年、などでは映写機の光学再生を楽器のように使っている。75)『まぜるな (MAZELUNA)』2008年は、生フィルムに現像液、定着液を直接塗って

画像（図柄）を作った映画だが、サウンド・トラックにも現像液・定着液で26コマ分先行したところにノイズを発生させるための図柄が描かれている。

この図柄を読み取って音にする光学再生の仕組みだが、93)『生フィルム裏 (RAW FILM BACKING)』2016年では、スクリーンに映るフィルムの傷などが出ずであろうノイズを作家奥山順市本人がライブパフォーマンスで、映写画面を見ながら口で出している。光学の音声再生の仕組みをよく知っていればいる程、画面の傷とぴったりと一致した口で出すノイズ（あるいはマイクを手で擦ったりとかもしていたのかもしれない）は、信じられないような名人の技であった。

4：奥山順市作品の身体性

奥山順市作品のほとんどはフィルムと切り離しては考えられない。63)『現像処方 Dev-18 (DEV-18)』2005年や、83)『つなぎ目 (SPLICE PART OF FILMS)』2011年、のようなビデオ、デジタルの作品であってもフィルムあるいはフィルムに関わる現像や編集がテーマになっている。フィルムという物理的なものの存在によって、撮影をしなくても図柄を映写することも出来る。70)『8ミリ・ミシン (8MM MACHINE)』2007年、71)『8ミリ・ミシン LIVE (8MM MACHINE LIVE)』2007年、のようにミシンで縫い付けることも出来る。



『8ミリ・ミシン (8MM MACHINE)』

フィルムが物理的な存在である限り、作家は身体的な行為を通してそれを扱うことになる。ライブのパフォーマーでもある奥山順市にとっては身体的な行為と結びつけやすいフィルムは表現上切り離せないメディアとなっているのだろう。ライブパフォーマンスも、シングルチャンネルでスクリーンに映写される“映画”も、どちらも奥山順市にとっては“実験映画”なのは、フィルムと身体的な行為という二つがどちらにもあるからではないか。デジタルでの映像制作、とりわけ編集作業がフィルムでのそれと著しく異なるのは情報処理的だからだ。フィルムを編集する場合は、フィルムを手を持って、切ったり貼ったりという身体的な行為と表現が直結している。フィルムでは映画の時間的な長さは、フィルムの物理的な長さとも一致する。25)『ランニングフレーム 4,000 (RUNNING FRAME 4,000)』1976年では4,000コマ（100フィート）のフィルムを被写体として100フィートのフィルムで撮影している。長いフィルムは大きな巻きになって重さも重くなる。デジタ

ルの映像は、長さに関係なく小さくて軽いカードに入ってしまう。一時間のものでも、一分のものでも、同じ大きさ、同じ重さのカードに入れることが出来る。これは勿論便利なことだが、フィルムを扱うのとは意識を変える必要があるだろう。

そして、フィルムは映写機にかけられて像が投影される。奥山順市作品で映写機にかけることができないフィルム作品は36)『フィルムロード (Load The Film to The Film's Road)』1984年、一つだけだった。映画はフィルムを映写機にかけて映写された画面を暗い部屋で、みんなで見るものである。あるいは、そうだった。スマホの画面をたった一人で、電車の中で見るのも映画である、と言われて納得は出来ないが、それがなぜ映画ではないのか?と問われて答えるのは簡単ではない。

奥山順市が探求しているのはこの“映画とは何か”なのかもしれない。しかしその“映画とは何か”はアンドレ・バザン (André Bazin) のように画面内で展開することだけではない。映画を成立させているあらゆる外形的側面、物理的側面、化学的側面、さらにはパフォーマンスなどの“身体的行為の直接的関与”までが含まれている。

奥山順市の“映画とは何か”は“映画の構造や、フィルムそのものの存在感をラディカルに表現”することによって見えてくるものということになる。奥山順市作品のサービス精神、作家自身の出演やライブパフォーマンス、そして制作における身体的行為、この身体性と映画の構造、フィルムの存在感という外形的なものが結びついたところに奥山順市の実験映画の特徴が表れているのではないか。作家のパーソナルな部分が作品への身体的関与によって明らかになる。作家の、映画の構造やフィルムの存在への深い愛情を、感情的に納得出来るのは作品に作者の身体性が現れているからではないだろうか。

終わりに



『HUMAN FLICKER・映画誕生』1975年初演 / 2018年再演

映画の構造やフィルムの存在への深い愛情を表現する作品の原点ではないかと思われる

のが1975年の21)『HUMAN FLICKER・映画誕生』である。アップで撮影された“眼”がスクリーンいっぱい映し出される。その眼がウインクするというシンプルな“映画”だが、見るべきはスクリーン上の“ウインクだけ”ではない。眼が写ったフィルムは二本あり、一本は眼の開いたもの、もう一本は眼の閉じられたものである。その二本のフィルムがそれぞれ、二台の映写機に掛けられて、同じ一つのスクリーン上にぴったり重なるように映写される。そのまま映写されれば、開いた眼と閉じた眼が二重写しになって見える筈である。しかし、二台の映写機の前に作者奥山順市が両手にそれぞれ団扇を持って立っている。その団扇で映写機のレンズを片方ずつ塞ぐのである。団扇でレンズが塞がれるので、片方の映像しか投影されない。その塞ぐタイミングでほぼ動かない眼のアップがウインクするのである。

一見とても単純なこのパフォーマンスで、我々は映画の動きが実際には動いていない“画像”を次々に見せられることによって、動いているかのように見える映画の動く仕組み（仮現運動）を実感することになる。そこには、動いていないものを間歇的に見せるための仕組み、シャッターが重要な役割を担っている。この映画にとって原点とも言えるシャッターに作者自身が成り切ることで、これは作者の身体性と映画の原理、構造が結びついた奥山順市の仕事の元になった作品の一つだと思われる。そしてそれは、その後の作品制作で、今もずっと、追求され続けている。

■ 2018年3月13日国立文書館(Archives nationales)でパリ第8大学(Université Paris 8)主催で行われた研究発表会「日本の遂行的映画 (Cinemas Performatifs au Japon)」の中で行なった「Autour des cinémas expérimentaux de Jun'ichi OKUYAMA」に加筆したものです。本研究はJSPS科研費JP15K12831の助成を受けたものです。

■掲載の作品写真は奥山順市氏提供、『HUMAN FLICKER・映画誕生』再演の写真は片山薫氏提供。

奥山順市の仕事 注

注 1

イメージフォーラム・フェスティバル 1992 カタログ より

奥山順市 作品 ゲロイズムとその周辺

デリケートな無神経さでタブーを逆撫でするキッチュな悪趣味の世界は、ベーシックな欲望と潜在意識を揺さぶり続ける。潔癖症の青春時代に妄想のイメージを表現した、怖いもの見たさの殴り描き映画。1960年台後半のアンダーグラウンド映画に属する初期のゲロイズム関連を集めた作品でありながら、混沌とした現代の世相をあぶり出している様でかえって今、新しい。

★印はホームページに記載のある作品

『モダン・ウンチング・タイムス』 1967 16mm 2分

『私は……』 1967 16mm 4分

『くちむし』 1968 16mm 13分

★『ZERO MAN CO.,LTD』 1969 16mm 7分

『インボデヤンス』 1969 16mm 39分

『たれまら』 1970 16mm 1分

- 『モダン・ウンチング・タイムス INDIA』 1970 16mm 4分
- 『モダン・ウンチング・タイムス USSR』 1970 16mm 3分
- 『胎児の歌』 1970 16mm 1分
- 『ブルーフィルム』 1970 16mm 1分
- ★『YELLOW JAP』 1970 16mm 2分
- 『モダン・ウンチング・タイムス No 2』 1971 16mm 5分
- ★『ごあいさつ』 1971 16mm 2分
- 『やにだれ童子』 1971 16mm 9分
- ★『喫煙者』 1971 16mm 15秒
- 『ぶちゃぶちゃびっちらこ』 1971 16mm 1分
- 『ちんちん電車のマラ特急』 1974 16mm 3分
- 『ボツ発！ おまら騒動』 1974 16mm 3分

注2 奥山順市 100 作品リスト 簡単な分類に関する解説付き (作品制作時の年齢入り)

- 1) 『MU』 1964年 (17歳) レギュラー8 (16ミリ版の上映可能) 3分
撮影 マスキングして画面の半分ずつを撮影、巻き戻し
- 2) 『BANG VOYAGE』 1967年 (20歳) 16ミリ 18分 撮影 コマ撮り 連続した動きにならない
- 3) 『FRAMELESS 35』 1968年 (21歳) 35ミリ 3分 編集 ファウンドフッテージ
- 4) 『切断 (Cut Off Movie)』 1969年 (22歳) 16ミリ・ライブ 15分
フィルム 編集 フィルム以外の素材を繋ぎ込む 映写パフォーマンスでもある
- 5) 『Zero-man Co.,LTD.』 1969年 (22歳) 16ミリ 7分 撮影 編集 どちらかと言えば フィルム的事実
- 6) 『わか・Being Painted』 1970年 (23歳) 35ミリ・ライブ 15分 (16ミリでのライブ、ビデオ収録版の上映可能) 映写 フィルム 上映しながら画像を作る
- 7) 『Outrage (手ごめ)』 1970年 (23歳) (ホームページ、写真美術館カタログでは1971年) 16ミリ 3分
現像 現像途中で物理的に加工
- 8) 『Yellow JAP』 1970年 (23歳) 16ミリ 2分 撮影 編集 どちらかと言えば フィルム的事実
- 9) 『山の手線・内回り篇 (YAMANOTE LINE COUNTER CLOCK WISE)』 1970年 (23歳) 16ミリ 3分
インスタレーション 映写
- 10) 『山の手線・外回り篇 (YAMANOTE LINE CLOCK WISE)』 1970年 (23歳) 16ミリ 3分
インスタレーション 映写
- 11) 『ごあいさつ (A GREETING)』 1971年 (24歳) 16ミリ・ライブ 2分
パフォーマンス スクリーン内の映写画面と映写会場の作者の会話
スクリーン内の人物 (ネガ像) と、映写会場の作者が話をするライブパフォーマンスの作品。
- 12) 『1 / 24』 1971年 (24歳) 16ミリ 3分 (写真美術館カタログではループフィルムとなっている)
インスタレーション 非連続のコマ撮りをループ映写。1コマずつ異なる映像のループフィルム。
- 13) 『Cine Virgin・映像処女』 1971年 (24歳) 16ミリ・ライブ 3分 (写真美術館カタログでは『映像処女・Cine Virgin』) パフォーマンス 生フィルムを映写機にかける 映写? フィルム? 撮影?
未開封の生フィルムを、いきなり映写機にかけるパフォーマンス。

- 14) 『喫煙者 (SMOKER)』 1971 年 (24 歳) 16 ミリ 1 分 (5 秒の同じショットを 3 本繋いだ 15 秒の
エンドレスループ。ビデオ版上映可能) エンドレスループの映画 映写 編集
- 15) 『No Perforations』 1971 年 (24 歳) 16 ミリ・ライブ 10 分 (収録版 16 ミリフィルムの上映可能)
映写パフォーマンス フィルム 映写
- 16) 『Frameless 16』 1971 年 (24 歳) 35 ミリ・16 ミリ・2 台マルチ 3 分 (16 ミリ版の上映可能)
フィルム 映写 映写フレームが無い 16 ミリフィルム
- 17) 『紙映画 (PAPER FILM)』 1972 年 (25 歳) 16 ミリ・ライブ 15 分 (収録版 16 ミリフィルムの上
映可能) フィルム フィルムベースの素材 フィルム自作 映写パフォーマンス
- 18) 『観光映画 (SIGHTSEEING FILM)』 1973 年 (26 歳) 16 ミリ 10 分 サウンドのみの映画 画面
はスヌケ
- 19) 『魔訶不思議な魂の消滅を信じてー消滅地獄 A hell, to see mysterious desolving split』 1974 年 (27 歳)
16mm2 台・W8mm1 台・スライド 1 台・マルチ・ライブ 40 分 パフォーマンス 映写 効果音
を肉声で発声
- 20) 『LE CINÉMA・映画』 1975 年 (28 歳) 16 ミリ 5 分 編集 映画の時間の構造分析 構造映画
的映画
- 21) 『HUMAN FLICKER・映画誕生』 1975 年 (28 歳) 16 ミリ 2 台・マルチ・ライブ 4 分
パフォーマンス 映写 仮現運動を作るシャッターを実演
- 22) 『体液・The Juices』 1975 年 (28 歳) 16 ミリ 7 分
フィルム 撮影したフィルムと、フィルムの上に直接ものを貼り付けたものをカットバック
- 23) 『5 ミリフィルム (5mm FILM)』 1975 年 (28 歳) 16 ミリ ライブ 5 分 映写パフォーマンス フィル
ム自作
- 24) 『SWING MOVIE』 1975 年 (28 歳) W8 ミリ ライブ 35 分 パフォーマンス 映写 撮影
- 25) 『ランニングフレーム 4,000 (RUNNING FRAME 4,000)』 1976 年 (29 歳) 16 ミリ 6 分
4000 コマ (100 フィート) のフィルムを被写体として 100 フィートのフィルムで撮影
- 26) 『膨張するフレーム (Expand the Frame)』 1977 年 (30 歳) 16 ミリ ライブ 3 分
パフォーマンス 映写 インスタレーション
- 27) 『スウィング・アンソロジー (SWING ANTHOLOGY)』 1977 年 (30 歳) 16 ミリ ライブ 35 分
パフォーマンス 映写 撮影
- 28) 『スウィング・ムービー 2 (SWING MOVIE 2)』 1977 年 (30 歳) 16 ミリ ライブ 15 分
パフォーマンス 映写 撮影
- 29) 『映画の原点 (Flip It - Crossing Parallax)』 (習作) 1978 年 (31 歳) 16 ミリ 5 分
撮影 編集 仮現運動の実証的分析?
- 30) 『映画の原点 Origin of motion picture』 1978 年 (31 歳) 35 ミリ 4 分 (16 ミリ版の上映可能)
撮影 編集 仮現運動の実証的分析
- 31) 『スウィング・マルチ (SWING MULTI)』 1979 年 (32 歳) 35 ミリ・16 ミリ・W8 ミリ 各 1 台 マ
ルチ・ライブ 30 分 パフォーマンス 映写 撮影
- 32) 『我が映画旋律 My Movie Melodies』 1980 年 (33 歳) 35 ミリ 7 分 (16 ミリ版の上映可能)
サウンド・トラックを撮影 撮影 光学サウンド・トラックの実証的分析
- 33) 『E & 』 1981 年 (34 歳) 16 ミリ 7 分 撮影 フィルム ベース面からも撮影
- 34) 『Movie Watching』 1982 年 (35 歳) 16 ミリ 12 分

- 編集 35ミリフィルムを一目ずつ繋ぐ フレームラインのズレの研究
- 35) 『写真を刻む (Keeping The Time of Photpgraph)』1983年 (36歳) 16ミリ6分
撮影 編集 仮現運動の実証的分析
- 36) 『フィルムロード (Load The Film to The Film's Rood)』1984年 (37歳) 35ミリ 誌上ムービー (映写機には掛からない) フィルム 映写機にかからない二股のフィルム
- 37) 『まくぎれ (MAKUGIRE ,A Curtainfall with Peel off the emulsion)』1984年 (37歳) 16ミリ10分
フィルム 乳剤 乳剤の剥離
- 38) 『シネマッサージ (Cine Massage)』1985年 (38歳) 16ミリ10分 フィルム乳剤の剥離 (乳剤が削られる)
- 39) 『映画装填の乱 (A Bacchanalia about loading film)』1985年 (38歳) 16ミリ2台 マルチ・ライブ 30分
パフォーマンス 映写 一本のフィルムを二台の映写機にかける
- 40) 『映画する人 (A Man playing movie)』1986~1987年 (39~40歳) 16ミリ10分撮影 光学同時録音 シャッター流れ
- 41) 『映画のフレーム (The Frames of Movie)』1988年 (41歳) 16ミリ7分
撮影 映写 撮影フレームを見せる試み
- 42) 『タイムスリット (The time slit)』1989年 (41歳) 16ミリ6分 フィルム 撮影 映写
- 43) 『表から裏から同時に (At a same time , Exposed both sides)』1990年 (42歳) 16ミリ6分
フィルム 撮影 乳剤面、ベース面、同時撮影
- 44) 『シャッター・チャンス (A Chance for a good shot)』1991年 (43歳) 16ミリ5分
編集 スプライスについての実証的分析
- 45) 『フィルム三昧 (Spend my days in movie)』1992年 (44歳) ビデオ8分30秒
フィルム ファウンドフッタージ 編集
- 46) 『日光写真・活動篇 (A Sun picture Movie)』1993年 (45歳) ビデオ 7分
撮影 (日光写真) 映写 (ムビオラ) 現像なし
- 47) 『浸透画 (Osmography)』1994年 (46歳) 16ミリ9分フィルム 現像 撮影なし 光学サウンドトラック
- 48) 『クロス・プロジェクション (The Cross Projection)』1994年 (46歳) 35ミリ1台16ミリ3台8ミリ3台スライド4台ビデオ2台モニター2台 マルチ・ライブ 20分 パフォーマンス 映写
- 49) 『ストップ・モーション (STOP MOTION)』1995年 (47歳) 16ミリ10分 撮影 映写 横走りのフィルム
- 50) 『INGAの世界 (Touching the INGA;Negative with positive)』1996年 (48歳) 16ミリ11分
フィルム 撮影 現像 映写 ネガフィルムにプリント 全て自家処理
- 51) 『時の流れに乗せて (TOKI NO NAGARE NI NOSETE (MY SELF TIMER) Riding the currents of Time)』1997年 (49歳) 16ミリ7分 撮影 ループフィルムでの超多重露光撮影 全て自家処理
- 52) 『サンドイッチ (Sandwich)』1998年 (50歳) 16ミリ6分
撮影 2本のフィルムに紙を挟んでサンドイッチ撮影
- 53) 『スウィング・ムービー '98 (SWING MOVIE '98)』1998年 (51歳) 16ミリ3台8ミリ3台70ミリ1台ビデオカメラ3台モニター6台マルチ・ライブ ループ (エンドレス) インスタレーション 映写フィルムのオブジェ

- 54) 『リュミエールから (LUMIÈRE)』1998年? (51歳) 16ミリ インスタレーション
 インスタレーション 映写
- 55) 『光を浴びて (Black in the Light)』1998年? (51歳) 35mmスライド映写機2台 インスタレーション
 インスタレーション 映写
- 56) 『光の中で (IN THE LIGHT)』1999年 (52歳) 16ミリ7分 映写 映写機のランプを見る映画
- 57) 『奥山順市展の記録 (CINÉMA INSTALLATION)』2000年 (52歳) ビデオ 25分
 1998年に東京都写真美術館で開催された「奥山順市展」のパーソナルな記録
- 58) 『Sync pic あっ! 画を見てから音が聴こえる (SYNC PIC)』2001年 (53歳) 16ミリ14分
 光学サウンドトラックを撮影して作成
- 59) 『未現ゾーン (Harf DEV.)』2002年 (54歳) 35ミリ5分 16ミリ版あり 現像
- 60) 『フレームレス8 同時上映トリプル8(???)』2002年 (55歳) 8ミリ・フィルム (ダブル8〈1台〉・
 シングル8〈2台〉) マルチ・ライブ 4分パフォーマンス映写一本の8ミリフィルムを3台の映写機
 に通して上映、映写
- 61) 『映画時間のズレ (THE DEVIATION of THE MOVIE TIME)』2003年 (56歳) 16ミリ9分
 撮影 一本のフィルムを二台のカメラに通して半分ずつマスク撮影
- 62) 『OMEGAHEROME(3D GOOOOO!)』2004年(57歳)16ミリ11分 立体実験映画 鑑賞方法 立体(交
 差法) 撮影 映写 裸眼立体視映画
- 63) 『現像処方 Dev-18 (DEV-18)』2005年 (58歳) ビデオ 9分30秒
 現像(薬品) 撮影 現像薬品をフィルムに直接貼り付け
- 64) 『W8は16ミリ (Regular 8 is 16mm film)』2006年 (59歳) 16ミリ11分
 映写 編集 フィルム (のフォーマット)
- 65) 『W8は16ミリ / ライブ版 (Regular 8 is 16mm film / LIVE)』2006年6月16日 (59歳) 於:
 Super Deluxe 16ミリ6台 ライブ 20分 パフォーマンス 映写 編集 フィルム (のフォー
 マット)
- 66) 『FILMUSICA』2006年6月16日 (59歳) 於: Super Deluxe W8ミリ&16ミリ映写機各1台 ラ
 イブ10分
 パフォーマンス 映写 W8光学サウンドトラック (存在しない) を無理やり再生
- 67) 『Human Flicker・映画誕生』アニメバージョン1975 / 2006年 (59歳) 16ミリ (2台) ビデオ (マ
 ルチ) ライブ 7分 パフォーマンス 映写 仮現運動を作るシャッターを実演
- 68) 『動けなくなった8ミリ映画』2006年9月16日 (59歳) (初演) 於: 日本科学未来館 シングル
 8映写機 ライブ 5分 パフォーマンス 光学サウンド・トラック再生を小さな光で“演奏”
- 69) 『Human Flicker』1975 / 2007年 (60歳) 16ミリ (2台) ビデオ (マルチ) ライブ 7分
 パフォーマンス 映写 仮現運動を作るシャッターを実演
- 70) 『8ミリ・ミシン (8MM MACHINE)』2007年 (60歳) ビデオ (DVD) 11分
 フィルム フォーマット 8ミリを16ミリに縫い付ける
- 71) 『8ミリ・ミシン LIVE (8MM MACHINE LIVE)』2007年 (60歳) URTRA MIX (16ミリ映写機
 / ミシン / ビデオカメラ / モニター) ライブ6分 パフォーマンス フィルム フォーマット 8
 ミリを16ミリに縫い付ける
- 72) 『The INDEX』2007年 (60歳) ビデオ 12分 これまでの作品から23本をダイジェストで見せる

- 73) 『Filmusica MIX』 2007年 (60歳) 16ミリ (1台) / 8ミリ (3台) / W8ミリ (1台) / ビデオ ライブ 10分
パフォーマンス 映写 光学サウンド再生
- 74) 『Jun'ichi Okuyama's Index Movie』 2008年 (61歳) ビデオ 30分
これまでの作品から28本をダイジェストで見せる
- 75) 『まぜるな (MAZELUNA)』 2008年 (61歳) 16ミリ 5分 オリジナル版
フィルム 生フィルムに現像液、定着液を直接ペイントして画像、音声 (光学) に
- 76) 『The Video-Film / Live』 2008年 (61歳) 16ミリ (2台) & ビデオ ライブ 15分
パフォーマンス フィルム フォーマット 映写
- 77) 『エマルジョン・ペインター (Emulsion Painter)』 2009年 (62歳) 16ミリ 10分 オリジナル版
フィルム エマルジョン (乳剤) をフィルムに直接塗り画像 (とサウンド) に
- 78) 『Free Hands』 2009年 (62歳) OHP ライブ 10分 パフォーマンス 映写 実物投影
- 79) 『残り画 (THE REMAINDER IMAGES)』 2010年 (63歳) 16ミリ 8分 (18コマ/秒) オリジナル版
フィルム 乳剤 乳剤の濃淡で画像を作る サイレント (18コマ/秒)
- 80) 『ムービング・ジョッキー (Moving Jockey)』 2011年 (64歳) 16ミリ ライブ 7分
パフォーマンス 映写 語り
- 81) 『ケミカル・アクセス (Chemical Access)』 2011年 (64歳) 16ミリ ライブ 7分
パフォーマンス 映写 現像 ループの生フィルムを、映写中に化学変化させる行為。
- 82) 『未現ゾーン マルチ (Harf DEV.MULTI)』 2002 / 2011年 (64歳) ビデオ版上映 (マルチ) オリジナル 35ミリ ライブ 5分 パフォーマンス 映写 現像 唄
- 83) 『つなぎ目 (SPICE PART OF FILMS)』 2011年 (64歳) ビデオ 10分 フィルム 編集 スプライス
- 84) 『一秒の一コマ (1 FRAME OF 1 SEC)』 2012年 (65歳) ビデオ 6分 編集 映写 仮現運動の実証的実験
- 85) 『皮透かし』 2012年 (65歳) ビデオ / 16ミリ ライブ 4分
パフォーマンス フィルム (を果物の皮で) 映写
- 86) 『映画のフレームラインと送り穴』 2012年 (65歳) 16ミリ ライブ 10分
パフォーマンス 映写 フレームライン、送り穴を見る
- 87) 『透かしてみれば (PROJECTION SKIN FILMS)』 2013年 (66歳) デジタル 9分
フィルム 果物などの皮でフィルムを作り透かして見る
- 88) 『W8 光学トーカー (Regular 8mm Optical Talkie)』 2014年 (67歳) デジタル 6分
フィルム フォーマット (W8) W8 光学サウンド システム
- 89) 『皮のフィルム (SKIN FILMS)』 2015年 (68歳) 16ミリ ライブ 5分
パフォーマンス フィルム (果物の皮で作った皮フィルム) 映写
- 90) 『未現ゾーン浸蝕 (THE UNDEVELOPED ZONE EROSION)』 2015年 (68歳) 35ミリ ライブ 5分
パフォーマンス 現像 映写 唄
- 91) 『未現ゾーン浸蝕 反射像・透過像 (THE UNDEVELOPED ZONE EROSION REFLECTED IMAGES AND TRANSMISSION IMAGES)』 2015年 (68歳) デジタル 12分 現像 未現像ゾーン

- 92) 『Filmusica Close Open』 2015年 (68歳) 16ミリ + デジタル ライブ 8分
パフォーマンス 光学サウンド 音声再生 映写で音を出す
- 93) 『生ヒルム裏 (RAW FILM BACKING)』 2016年 (69歳) 16ミリ 11分 ライブ
パフォーマンス ハレーション防止層を見せる 作者は、〈語り・唄・効果音〉の弁士としても登壇
- 94) 『ん! 打々 (n!DADA)』 2016年 (69歳) 35ミリ + コラボビデオ2面 観客参加型フィルムパフォーマンスの実験映画 約40分 パフォーマンス 観客参加型、観客は映写中にフィルムにペイント、合唱 作家は映写速度調整など
- 95) 『8ミリ生フィルムのすべて』 2016年 (69歳) ①シングル8 (又はスーパー8) ②16ミリ 約14分
フィルム 編集 映写 この作品は、未現像の生の8ミリフィルムを一堂に会し、映写会場で見くらべる作品。〈シングル8〉〈スーパー8〉〈ポラヴィジョン〉〈ダブル8〉〈ダブルラン・スーパー8〉この五種類の8ミリ生フィルムが、そのまま登場。パート①は8ミリ映写機で上映。パート②の8ミリは、生フィルムが16ミリ幅なので、そのまま16mm映写機で上映。(ちなみに、通常このフィルムは、現像所で8ミリ幅に裁断される。)
- 96) 『歩くスクリーンと人力のカメラ映写機 (Walking screen and human-powered camera projector)』
2016年 (69歳) 11月5日第28回武蔵野はらっぱ祭り映像インスタレーションにて 16ミリ ライブ 約5分
パフォーマンス 映写 語り
- 97) 『W8は16mm / ライブ版ミニ (Regular8 is 16mm film / LIVE (mini version))』 2017年 (70歳)
16ミリ2台 ライブ 15分 パフォーマンス 映写 語り
- 98) 『わっか2017 (being painted 2017)』 1970 / 2017年 (70歳) 16ミリ+ビデオ ライブ 15分
パフォーマンス 映写 語り
- 99) 『Filmusica Close Open 2017』 2017年 (70歳) ダブル8 / 16ミリ / ビデオ ライブ 10分
パフォーマンス 光学サウンド再生
- 100) 『生ヒルム・ん! 打々 (THE RAW HILMU /N! DADA)』 2017年 (70歳) デジタル 20分
生フィルムに電気ドリルや半田ごてで穴を開けたり、溶かしたり、表と裏から透過光と反射光で像を見る

注 4 技法に関する分類 その 1 作品 (番号) をそれぞれの技法に分類			
撮影 分類記号 PV	一般的なカメラを使う撮影	PV C	1,2,5,8,11,14,17,20,25,26,29,30,44,45,50,56,57,59,72,74,84,91,93,
	カメラを使う特殊な撮影	PV SP	1,2,8,12,16,26,29,30,32,33,37,38,40,41,42 ?,43,49,51,52,58,61,62,84,90,
	“撮影”をしないで画像を作る	S PV	6,7,22,46,47,75,77 ?,79,85,87,89,98,100,
録音・音声 分類記号 S	同時録音撮影	PV SS	32,40,41,47,58,
	光学録音 分類記号 SO (磁気録音 分類記号 SM)	S O	18,32,40,41,47,58,66,68,73,75,88,92,99,
現像 分類記号 Dév	通常の現像、現像所での現像	DÉV N	
	特殊な方法での現像	DÉV SP	4,7,11,23,26,27,29,37,46 ?,47,50,51,59,63,64,77,81,82,87,90,91,
編集 分類記号 Montage	編集 ファウンド・フッテージ など Montage Found Footage etc.	Mon	3,4,20,30,34,35,44,46,50,64,72,74,83,84,88,95,
映写 分類記号 P	シングルチャンネルでスクリーンへ映写 (一般的な映画の方式)	P N	4,9,10,11,12,13,14,17,23,25,26,29,32,33,37,42,47,49,50,51,54,56,57,59,61,62,63,6 4,72,77,79,80,82,83,84,85,86,87,88,90,93,94,100,
	複数の画面、マルチスクリーン	P M	16,19,21,24,27,28,31,39,48,53,55,60,64,65,66,67,69,71,73,76,78,92,94,95,97,98,9 9,
	映写中に映写画面に介入	P D	4,6,11,13,15,17,21,27,28,67,68,69,78,85,86,90,92,93,94,96,98,99,
	映写機を映像の映写以外に使用	P SP	18,31,54,60,66,68,70,71,73,76,92,94,96,99,
材料、機材に関する分類			
フィルム	Film	2,13,15,16,17,36,37,45,70,75,79,80,83,85,87,88,89,93,95,97,100,	
カメラ	Camera	1,2,5,8,16,20,25,40,51,58,	
現像機材・薬品	Dév	50,51,59,63,77,79,81,82,90,91,	
編集機材・スライディングテープ・セメント	Montage	3,4,20,22,34,35,36,44,64,83,	
映写機	Projector	6,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,26,27,28,29,30,31,32,33,34,3 5,37,38,39,40,41,42,43,44,45,46,47,48,49,50,51,52,53,54,55,56,57,58,59,60,61,62, 63,64,65,66,67,68,69,70,71,72,73,74,75,76,77,78,79,80,81,82,83,84,85,86,87,88,8 9,90,91,92,93,94,95,96,97,98,99,100,	

注 4-2 技法に関する分類 その 2 100 作品の分布 / パーセンテージ			
撮影 分類記号 PV	一般的なカメラを使う撮影	PV C	23 作品 23%
	カメラを使う特殊な撮影	PV SP	24 作品 24%
	“撮影”をしないで画像を作る	S PV	13 作品 13%
録音・音声 分類記号 ES	同時録音撮影	PV SS	5 作品 5%
	光学録音 SO (磁気録音 SM)	S O	13 作品 13%
現像 分類記号 Dév	通常の現像、現像所での現像	DÉV N	79 作品 79%
	特殊な方法での現像	DÉV SP	21 作品 21%
編集 分類記号 Montage	編集 ファウンド・フッテージ など Montage Found Footage etc.	Mon	16 作品 16%
映写 分類記号 P	シングルチャンネルでスクリーンへ映写 (一般的な映画の方式)	P N	43 作品 43%
	複数の画面、マルチスクリーン	P M	27 作品 27%
	映写中に映写画面に介入	P D	21 作品 21%
	映写機を映像の映写以外に使用	P SP	14 作品 14%
材料、機材に関する分類			
フィルム	Film	21 作品 21%	
カメラ	Camera	10 作品 10%	
現像機材・薬品	Dév	10 作品 10%	
編集機材・スライディングテープ・セメント	Montage	10 作品 10%	
映写機	Projector	92 作品 92%	

注5 作品別分類一覧表

NO	題名 日本語	English Title	Year	Format	Time	Category
1	MU	MU	1964	W8	3'	PVC PV SP Camera
2	BANG VOYAGE	BANG VOYAGE	1967	16mm	18'	PVC PV SP Camera Film
3	FRAMELESS 35	FRAMELESS 35	1968	35mm	3'	Mon Montage
4	切断	Cut Off Movie	1969	16mm	15'	DÉVSP Mon PN PD Montage
5	Zero-man Co.,LTD.	Zero-man Co.,LTD.	1969	16mm	7'	PVC Camera
6	わか・Being Painted	Being Painted	1970	35mm liv	15'	SPV PD Projector
7	Outrage (手ごめ)	Outrage (手ごめ)	1970	16mm	3'	SPV DÉVSP
8	Yellow JAP	Yellow JAP	1970	16mm	2'	PVC PVSP Camera
9	山の手線・内回り篇	YAMANOTE LINE COUNTER CLOCK WISE	1970	16mm	3'	PN Projector
10	山の手線・外回り篇	YAMANOTE LINE CLOCK WISE	1970	16mm	3'	PN Projector
11	ごあいさつ	A GREETING	1971	16mm	2'	PVC DÉVSP PN PD Projector
12	1/24	1/24	1971	16mm	3'	PVSP PN Projector
13	映像処女	Cine Virgin	1971	16mm	3'	PN PD Projector
14	喫煙者	SMOKER	1971	16mm	1'	PVC PN Projector
15	No Perforations	No Perforations	1971	16mm	10'	PD Projector Film
16	Frameless 16	Frameless 16	1971	35&16mm	3'	PVSP PM Camera Projector Film
17	紙映画	PAPER FILM	1972	16mm	15'	PVC PN PD Projector Film
18	観光映画	SIGHTSEEING FILM	1973	16mm	10'	SO PSP Projector
19	魔訶不思議な魂の消滅を信じてー消滅地獄	A hell,to see mysterious desolving split	1974	16mm W8,slide	40'	PM Projector
20	LE CINÉMA・映画	LE CINÉMA	1975	16mm	5'	PVC Mon Caméra Montage Projecteur
21	HUMAN FLICKER・映画誕生	HUMAN FLICKER	1975	16mm × 2	4'	PM PD Projector

NO	題名 日本語	English Title	Year	Format	Time	Category
2 2	体液	The Juices	1975	16mm	7'	SPV Montage Projector
2 3	5ミリフィルム	5mm FILM	1975	16mm	5'	DÉVSP PN Projector
2 4	SWING MOVIE	SWING MOVIE	1975	W8	35'	PM Projector
2 5	ランニングフ レーム 4,000	RUNNING FRAME 4.000	1976	16mm	6'	PVC PN Camera Projector
2 6	膨張するフレ ーム	Expand the Frames	1977	16mm	3'	PVC PVSP DÉVSP PN Projector
2 7	スウイング・ア ンソロジー	SWING ANTHOLOGY	1977	16mm	35'	DÉVSP PM PD Projecteur
2 8	スウイング・ム ービー2	SWING MOVIE 2	1977	16mm	15'	PM PD Projector
2 9	映画の原点（習 作）	Flip It - Crossing Parallax	1978	16mm	5'	PVC PVSP DÉVSP PN Projecteur
3 0	映画の原点	Origin of motion picture	1978	35mm	4'	PVC PVSP Mon Projector
3 1	スウイング・マ ルチ	SWING MULTI	1979	35,16,W 8	30'	PM PSP Projector
3 2	我が映画旋律	My Movie Melodies	1980	35mm	7'	PVSP PVSS SO PN Projector
3 3	E & 	E & 	1981	16mm	7'	PVSP PN Projector
3 4	Movie Watching	Movie Watching	1982	16mm	12'	Mon Montage Projector
3 5	写真を刻む	Keeping The Time of Photpgraph	1983	16mm	6'	Mon Montage Projector
3 6	フィルムロー ド	Load The Film to The Film's Rood	1984	35mm		Film Montage
3 7	ま く ぎ れ (MAKUGIRE)	A Curtainfall with Peel off the emulsion	1984	16mm	10'	PVSP DÉVSP PN Film Projector
3 8	シネマッサー ジ	Cine Massage	1985	16mm	10'	PVSP Projector
3 9	映画装填の乱	A Bacchanalia about loading film	1985	16mm × 2	30'	PM Projector
4 0	映画する人	A Man playing movie	1986~8 7	16mm	10'	PVSP PVSS SO Caméra Projector

NO	題名 日本語	English Title	Year	Format	Time	Category
4 1	映画のフレーム	The Frames of Movie	1988	16mm	7'	PVSP PVSS SO Projector
4 2	タイムスリット	The time slit	1989	16mm	6'	PVSP PN Projector
4 3	表から裏から同時に	At a same time , Exposed both sides	1990	16mm	7'	PVSP Projector
4 4	シャッター・チャンス	A Chance for a good shot	1991	16mm	5'	PVC Mon Montage Projector
4 5	フィルム三昧	Spend my days in movie	1992	vidéo	8.5'	PVC Projector Film
4 6	日光写真・活動篇	A Sun picture Movie	1993	video	7'	SPV DÉVSP Mon Projector
4 7	浸透画	Osmography	1994	16mm	9'	SPV PVSS DÉVSP SO PN Projector
4 8	クロス・プロジェクション	The Cross Projection	1994	35,16,8, etc	20'	PM Projector
4 9	ストップ・モーション	STOP MOTION	1995	16mm	10'	PVSP PN Projector
5 0	INGAの世界	Touching the INGA;Negative with positive	1996	16mm	11'	PVC DÉVSP Mon PN Dév Projector
5 1	時の流れに乗せて	TOKI NO NAGARE NI NOSETE (MY SELF TIMER) Riding the currents of Time	1997	16mm	7'	PVSP DÉVSP PN Caméra Dév Projector
5 2	サンドイッチ	Sandwich	1998	16mm	6'	PVSP Projector
5 3	スウイング・ムービー '98	SWING MOVIE '98	1998	8,16,35, 70		PM Projector
5 4	リュミエールから	LUMIÈRE	1998	16mm		PN PSP Projector
5 5	光を浴びて	Black in the Light	1998	35,slide		PM Projector
5 6	光の中で	IN THE LIGHT	1999	16mm	7'	PVC PN Projector
5 7	奥山順市展の記録	CINÉMA INSTALLATION	2000	video	25'	PVC PN Projector
5 8	Sync pic あっ！画を見てから音が聴こえる	SYNC PIC	2001	16mm	14'	PVSP PVSS SO Camera Projector
5 9	未現ゾーン	Harf DEV	2002	35mm	5'	PVC DÉVSP PN DÉV Projector

NO	題名 日本語	English Title	Year	Format	Time	Category
60	フレームレ 8同時上映トリ ブル8		2002	W8,S8,	4'	PM PSP Projector
61	映画時間のズ レ	THE DEVIATION of THE MOVIE TIME	2003	16mm	9'	PVSP PN Projector
62	OMEGAHERO ME	3D GOOOOO!	2004	16mm	11'	PVSP PN Projecteur
63	現像処方 Dev-18	DEV-18	2005	video	9.5'	DÉVSP PN Dév Projector
64	W8は16ミリ	Regular 8 is 16mm film	2006	16mm	11'	DÉV Mon PN PM Montage Projector
65	W8は16ミリ/ ライブ版	Regular 8 is 16mm film / LIVE	2006	16mm × 6	20'	PM Projector
66	FILMUSICA	FILMUSICA	2006	W8 16mm	10'	SO PM PSP Projector
67	Human Flicker・映画誕 生アニメ	Human Flicker animation	2006	16 × 2 video	7'	PM PD Projector
68	動けなくなっ た8ミリ映画		2006	S 8	5'	SO PD PSP Projector
69	Human Flicker	Human Flicker	1975/ 07	16 video	7'	PM PD Projector
70	8ミリ・マシン	8MM MACHINE	2007	video	11'	PSP Film Projector
71	8ミリ・マシン ライブ	8MM MACHINE LIVE	2007	URTRA MIX	6'	PM PSP Projector
72	The INDEX	The INDEX	2007	video	12'	PVC Mon PN Projector
73	Filmusica MIX	Filmusica MIX	2007	W8,S8,1 6,v	10'	SO PM PSP Projecteur
74	Jun'ichi Okuyama's Index Movie	Jun'ichi Okuyama's Index Movie	2008	video	30'	PVC Mon Projector
75	まぜるな	MAZELUNA	2008	16mm	5'	SPV SO Film Projector
76	The Video-Film / Live	The Video-Film / Live	2008	16, video	15'	PM PSP Projector

NO	題名 日本語	English Title	Year	Format	Time	Category
77	エマルジョン・ペインター	Emulsion Painter	2009	16mm	10'	PVS DÉVSP PN Dév Projector
78	Free Hands	Free Hands	2009	OHP	10'	PM PD Projector
79	残り画	THE REMAINDER IMAGES	2010	16mm	8'	PVS PN Film Dév Projector
80	ムービング・ジョッキー	Moving Jockey	2011	16mm	7'	PN Film Projector
81	ケミカル・アクセス	Chemical Access	2011	16mm	7'	DÉVSP Dév Projector
82	未現ゾーンマルチ	Harf DEV.MULTI	2002 /11	vidéo	5'	DÉVSP PN Dév Projector
83	つなぎ目	SPLICE PART OF FILMS	2011	video	10'	Mon PN Film Montage Projector
84	一秒の一コマ	1 FRAME OF 1 SEC	2012	video	6'	PVC PVSP Mon PN Projector
85	皮透かし		2012	16,vidéo	4'	SPV PN PD Film Projector
86	映画のフレームラインと送り穴		2012	16mm	10'	PN PD Projector
87	透かしてみれば	PROJECTION SKIN FILMS	2013	Digital	9'	SPV DÉVSP PN Film Projector
88	W8 光学トークー	Regular 8mm Optical Talkie	2014	Digital	6'	SO Mon PN Film Projector
89	皮のフィルム	SKIN FILMS	2015	16mm	5'	SPV Film Projector
90	未現ゾーン浸蝕	THE UNDEVELOPED ZONE EROSION	2015	35mm	5'	PVSP DÉVSP PN PD Dév Projector
91	未現ゾーン浸蝕 反射像・透過像	THE UNDEVELOPED ZONE EROSION REFLECTED IMAGES AND TRANSMISSION IMAGES	2015	Digital	12'	PVC DÉVSP Dév Projector
92	Filmusica Close Open	Filmusica Open Close	2015	16, Digital	8'	SO PM PSP Projector
93	生ヒルム裏	RAW BACKING FILM	2016	16mm	11'	PVC PN PD Film Projector

NO	題名 日本語	Title english / Titre Français	année	format	temps	Catégorie
94	ん！打々	n!DADA	2016	35, video	40'	PN PM PSP Projector
95	8ミリ生フィルムのすべて		2016	S8,16mm m	14'	Mon PM Film Projector
96	歩くスクリーンと人力のカメラ映写機	Walking screen and human-powered camera projector	2016	16mm	5'	PD PSP Projector
97	W8は16mm / ライブ版ミニ	Regular8 is 16mm film / LIVE (mini version)	2017	16mm × 2	15'	PM Film Projector
98	わっか 2017	being painted 2017	1970 / '17	16, video	15'	PSV PM PD Projector
99	Filmusica Close Open 2017	Filmusica Close Open 2017	2017	W8,16, video	10'	SO PM PD PSP Projector
100	生ヒルム・ん！ 打々	THE RAW HILMU /N! DADA	2017	Digital	20'	SPV PN Film Projector

